

第2章 丹波篠山市の概要

1. 自然的風土

(1) 地勢

丹波篠山市は、篠山盆地と盆地を取り囲む約400mから800m級の山地で構成されています。篠山盆地は地殻変動や堆積作用によって形成されたと言われ、この堆積作用によって緩やかな山裾は埋まり、丹波篠山の特徴とされる平地と急斜面が接し緩斜面や棚田がほとんど見られない地形が形成されました。また、篠山盆地の周辺は、山間から流れる谷川が、谷合深く入り込む形で指を広げたような形の谷筋が形成され、盆地内に点在する島状の孤立丘、篠山川沿いの竹林や集落の鎮守林と共に平坦な田園に緑の屏風が重なり合っているような緑豊かな景観を形成しています。

丹波篠山市は、加古川、武庫川および由良川の源流域に位置しています。加古川支流の篠山川は盆地中央部を東から西へ流れていることから、低い丹波篠山の山並みが東西に連なっていることが分かります。低い山が多いことから、多くの支流が谷をつくり、いくつもの山地-谷筋-低地等のまとまり（ランドユニット）となって、河川の水系を基盤とした丹波篠山の地勢を形成しています。

盆地領域は、取り囲む山並みによって南北4km、東西12km余の大きさを有していますが、王地山などの小丘や張り出した丘陵地などにより、視覚的にはほぼ半径1km圏の空間単位が東西に連なる山並みに沿って構成されています。この視覚領域では、人は見上げることなく自然に盆地を取り囲む山並みの全姿を見ることができます。山並みは山紫*とならず、常に緑の山並みとして山地全体だけでなく一本の樹幹まで同時に眺めることができ、季節および霞や霧などの気象変化の風景を楽しむことができる、程よい距離感に位置しています。



図Ⅱ－1 地勢図

* 日の光の中で山がかすんで紫色に見える様子。

(2) 植生

低い山が多いために古くから人の手が入った森林のほとんどは、アカマツ林やスギ・ヒノキの二次林で構成されています。チャート（珪石）^{*}の多い酸性土壌の山頂部はア52カマツ林やツツジ科の植物で覆われ、谷筋にはコナラ群落が帯状に分布しています。集落からの谷筋や山裾部には、スギ・ヒノキの植林地がきめ細かく散在分布しています。

貴重植生として、標高600m以上の山地にある山林と一体となった社寺林にモミ林が残る他、シイ・カシ林に当たるコジイ・カナメモチ群集等が見られます。山腹にはクマザサが生えているところも多く、谷川沿いには落葉広葉樹、集落沿いの河川にはケヤキの大木が散在する竹林が多く繁茂しています。また、多紀連山の山頂には、常緑針葉樹のモミ群落、アカマツ・シノブ群落の他、シャクナゲ、イワカガミ、ヒカゲツツジ、イワウチワ等の高山植物が見られ、御嶽の山腹にはクリンソウが、東部の里山裾にセツブンソウ等の大群落が確認されています。西光寺には内陸部では珍しい海岸植生のウバメガシ群落が分布し、古来の地殻変動を伝えるものとされています。

(3) 気象

平成21年の年間平均気温は、約12.7℃、年間降水量は約1,350mmで、11月には降霜があります。夏は蒸し暑くて冬は底冷えが厳しく（年較差）、また、昼夜の気温差（日較差）が大きい内陸性気候となっています。晩秋には日較差から山並みの美しい紅葉を見ることができるほか、盆地内において深い霧が発生します。丹波茶や黒豆のおいしさは、この丹波霧によるところが大きいと言われています。また、濃霧が山並みを包み込む大変幻想的で美しい眺めは、雲海として広く知られています。

2. 社会的風土

(1) 歴史

篠山地方は、古くから人々の暮らしが営まれてきた地方です。その足跡は、今から約2万5千年前の旧石器時代の遺跡である板井・寺ヶ谷遺跡にまで遡ることができます。

市域では、縄文、弥生時代の人々の生活を物語る遺跡が数多く発見されているほか、古墳時代には県下第2位の規模をもち、強大な権力者がいたことを示唆する雲部車塚古墳が築造されています。

大化の改新後、律令国家の支配が各地方に及び、篠山地方でも郡家に多紀郡衙が、寺内に寺内廃寺が設けられます。その後、奈良時代から中世にかけて、大国寺や和田寺に代表される仏教を中心とした文化が栄えることとなります。

平安時代を迎えるころには、荘園経営に関する貴重な古文書が多数残されている東寺領大山荘をはじめ、多くの荘園が設けられました。

中世の終わりには、波多野氏が高城山に八上城を築き、丹波一帯を勢力範囲としていました。これに対し、織田信長は天正年間、丹波攻略を目的として明智光秀を差し向け、八

^{*} 火山灰や生物遺骸などが堆積して固まった岩石。

上城は1年余りの包囲戦によって落城しました。

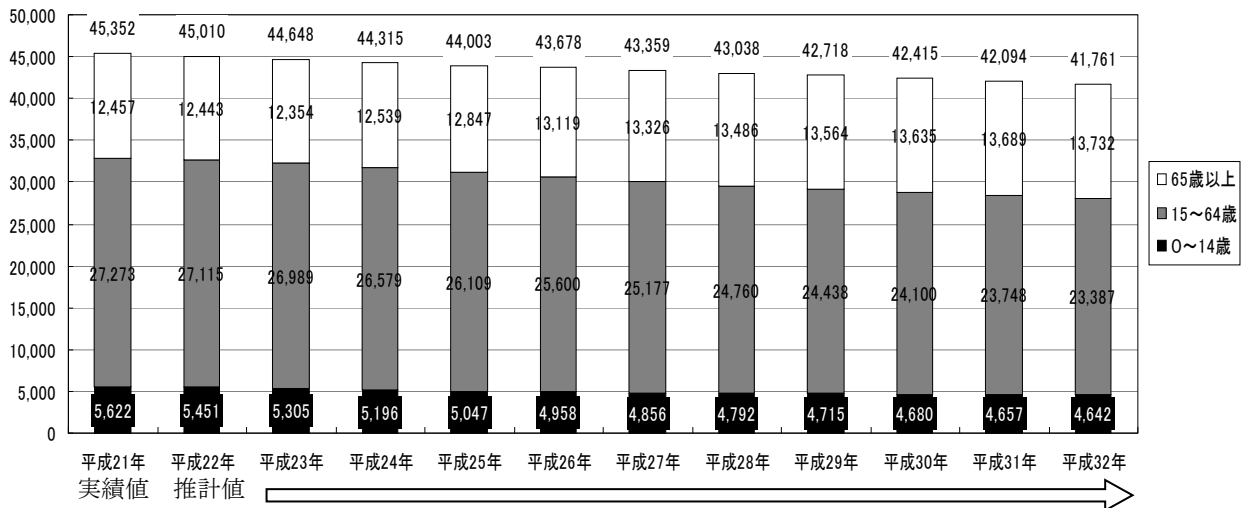
その後、徳川家康が西日本の諸大名の監視のために、京都と山陰、山陽を結ぶ交通の要衝であるこの地に篠山城を築城し、実子の松平康重を初代城主として送り込みました。この築城は天下普請によって行われ、西日本の諸大名が多数動員されました。完成度の高い城郭がわずか9ヶ月という短期間のうちに築かれ、引き続き城下町の整備が行われました。この城が築かれた丘陵地が「笹山」であったことから、以後、この地方は「篠山」と呼ばれるようになります。また、京都への重要な交通路であった旧京街道沿いの福住や、摂津・播磨・柏原への交通の要所であった古市と追入は、宿場町として栄えました。

明治維新後、明治22(1889)年に市制・町村制が施行された際、多紀郡では1町17村が成立しました(その後、1町18村)。それから、幾度の合併を経て平成11(1999)年4月1日に篠山市(現丹波篠山市)が誕生して現在に至っています。

(2) 丹波篠山市の将来人口と市民意識

■人口

戦後減少を続けていた丹波篠山市の人口は、平成2年頃から増加に転じましたが、平成14年から再び減少していきます。平成22年10月末では、人口44,958人、高齢化率27.5%となっています。平成23年度に策定された篠山市(現丹波篠山市)の総合計画の基本構想では将来の人口は、さらに減少すると予想し、10年後の平成32年には41,000~42,000人、高齢化率は32%になると想定されており、人口減少の中で高齢化がさらに進展することになります。こうした人口動向を受けて地域の活性化や定住促進にも寄与する景観施策を検討していく必要があります。



図Ⅱ-2 人口推移(平成21年~平成32年)

■市民意識

篠山市（現丹波篠山市）総合計画（以下総計）策定に向けたアンケート調査では、74%が「自然環境や景観」に満足しており、定住理由も45%が「自然環境がよいから」と答えており、「自然環境のよさ」は年齢が若くなるほど高い傾向にあります。篠山市（現丹波篠山市）総合計画では、人口減少と少子高齢化や経済雇用の変化等に対応したこれからのまちづくりの方向性の4本柱のひとつに、今日では貴重となった篠山盆地等の「田園景観の保全・整備・創造」をあげており、特に平成22年閣議決定された「地域主権戦略大綱」に基づき、近い将来土地利用等に関する権限の多くが市に委譲される見込みの中で、公正で効率的なルールを確立し、地域の貴重な財産である「田園景観を継承する」責任を果たすことが強く求められていると明記されています。

■近年の開発動向

篠山市（現丹波篠山市）の人口は平成2年から7年にかけて増加し、JR篠山口駅周辺を中心に宅地化が進展しました。特に平成9年のJR福知山線の複線化や阪神淡路大震災の影響により戸建て住宅を中心とする開発が幹線道路沿線でも見られるようになりました。平成当初は、味間地区や今田地域東部において人口増加傾向にありましたが、JRの複線化以降、城北、岡野、城南、西紀南地区での宅地化が進行し、これらの地区で人口増加の傾向が見られるようになりました。

JR篠山口駅周辺や住吉台周辺の宅地開発が沈静化した後は、そのやや郊外部のインターチェンジ付近を中心にスプロール[※]型の開発が進展していきます。また、旧城下町である既成市街地のドーナツ化と並行する形で、既成市街地の周辺の宅地化が進行し、篠山盆地内における宅地需要が増加している傾向があります。ただし、ここ数年は将来の社会不安や経済的な影響もあって、鎮静化傾向もうかがえる状況となっています。

※ 郊外への市街地化が計画的ではなく、無秩序に拡大していくこと。